

寺
こよみ

四月

一日 下村お講

六日 本山ご助成

八日 清掃奉仕

一四日 花つみ

一五日 花の誕生会

花の誕生会

一五日九時 お寺の学校

十時 初参式

おつとめ

記念珠贈呈

おはなし

縁日

冥加金 三千元

お申し込みは一日三日まで

一六日 栗虫お講

一九日 仏教入門講座

寺報

善 巧

発行

〒938-0862 富山県
黒部市宇奈月町浦山497
白雪山 善 巧 寺
TEL (0765) 65-0055
FAX (0765) 65-0975
メール info@zengyou.net
URL http://www.zengyou.net



四月十五日十時

花の誕生会

みんなのいのちありがとう

六月二日善巧寺本堂にて善巧寺第二十二代住職の結婚式を執り行うことになりました。

恥ずかしい話ですが、これが五年前の話だとして、おそろく式はひっそりと京都あたりで行い、披露宴も勘弁してくださいと断っていたように思います。お寺に帰り着き、ご門徒さんとの繋がりも徐々に感じ始めて、ようやく今「結婚します。一緒に祝ってください」と言えるようになりました。

結 婚

悟の上で僧侶として初めて公式に結婚された方でした。多くの僧侶から罵られ、お国からの罰を受ける覚悟は想像を絶します。現にお仲間には死刑を受けた方もおられるわけで、ぼくなら黙ってソリと伴侶をつくつていたに違いありません。

その覚悟を支えていた力は何だったのか？それはやはり、いつも真ん中に仏さまがおられたのでしよう。仏さまを大切にすることを中心に、それを妨げることにはなるべく避け、光のあることは例えイバラの道であっても進んで行こう。考えてみると、これほどスッキリした生き方はなく、憧れの諸先輩方の共通点はこの芯でした。諸行は無常の世の中で、絶対に変わらない芯。なにが一番大切かというところを見失わないように歩みたいものです。

善巧寺住職 雪山 俊隆

今思えばワガママとしか言いようがありませんが、個性が謳われ、自分という意識を強く感じながら育った多くの世代ならではの想いです。

親鸞聖人は、弾圧を覚

平

花

愚禿の名のり 二

行信教校講師 天岸浄圓師



親鸞聖人が三十三歳の時。そのあたりから、親鸞聖人もしくは法然聖人の周囲が慌たしくなってきました。いわゆる、念仏弾圧の火が付き始める頃です。その頃に親鸞聖人は聖徳太子の夢のお告げを抛り処にして、お師匠さまから頂かれた「綽空」というお名前をお返しになります。これは、頂いたお名前ですから、勝手に代えるということ

は失礼千万で、やはり許可を得なければなりません。その時、お師匠さまもそれなりの理由というものを書きつつとお聞きになったはずですから、それを聞いた上でお許しになったんでしょう。そのお名前を「善信」と申します。親鸞聖人ご自身は「夢の告に依りて、綽空の字を改めて、同じき日、御筆をもって名の字を書かしたまい畢りぬ。」とおっしゃっておられます。夢のお告げで綽空の字を改めていただき、お師匠さまである法然聖人のお筆で名前を書き添えていただきました。名前は書

いておられないのですが、幸いに、親鸞聖人のひ孫の子にあたる存覚上人というお方が、聖徳太子の夢のお告げを抛り処にして、善信というお名前を名乗られたとおっしゃいましたから、ほぼ間違いはないでしょう。ただ、なぜ名前をお代えになったかという理由は、親鸞聖人も存覚上人もおっしゃっておられません。ですから、正確なことはわかりません。これを推測してみるのは、お名前をお代えになった理由は結婚であろうと私は思います。よく、親鸞聖人はお坊さまの中で初めて奥様を迎えた方だと紹介されます。でも、それは少し正確ではないのです。調べてみますと、お坊さんの姿をしながら妻を迎えておられた方というのは、日本に限らず、どの世界にもいつの時代にも、ある程度おられました。そういう意味では、初めて妻

を迎えたお方ではないのです。親鸞聖人ご在世の頃でしたら、ある方がこんな言葉を残しています。「隠すは上人せぬは仏」。何を隠すかと言えば、お坊さんは連れ合いを隠し、結婚を実質しておられないのは仏さまぐらいじゃと皮肉っているわけですね。みんながみんなではありませんが、そう言われるほどに、僧侶が家庭を持つということが一般的な状況になっていたという事です。しかし、この方たちの結婚は、いわば仏さまに目隠しをして、世間からはおられないことにするというものでした。ようするに、お寺の奥のほうにおいてになつていただく「奥さま」です。ところが、親鸞聖人のご結婚というものは、それらとは違いました。わたしはお念仏の教えによつて妻を迎えますという、教えに従つて結婚を選ばれました。ですか

ら、仏さまにも隠しておられませんか、世間にも隠すことはなかったわけですか。しかし、この隠さないという一つの出来事が、今まで隠してきた方にとつてみれば都合が悪く、自分のことは棚にあげて、親鸞聖人に対して非常に厳しい弾劾の目を向けるようになります。妻帯するということは、当時のお坊さんたちからすれば、袈裟を付けるということとは生涯結婚はしませんということですから、お釈迦さまとの約束不履行になります。また、出家ですから家庭は持たず、修行に専念するということだったのです。だからお坊さんというのは尊敬されたのです。今の感覚からはおわかりいただけないかもしれませんが、名誉や地位や財産などを捨てきつて仏道修行に専念していますから、人々は尊敬をしてくださったのです。そういう形を

表に見せておる間はよかったのですが、それはいいのですよと言われると、社会一般の信頼を失墜する。実際はすでに失墜していたんですけどね。表だって結婚するということは、従来の仏教の顔に泥を塗るというわけですね。そこで親鸞聖人に対する風当たりというものが大変強くなります。しかし、聖人がご結婚されたという事柄は、私たちがよくよく聞いておかなければいけない問題なのです。と申しますのは、まず一つは如来さまのご本願は、結婚するかしないかでお助けを決めませんよと、いわゆる、出家在家を問わないとおっしゃったんですね。それまでの感覚では、やはり出家のほうで仏さまに近い生活、在家はそれだけ仏さまから遠い生活と考えられていました。阿弥陀さまのご本願は出家も在家も問いません。それに拠り処

を求められたというのがひとつで、それからもう一つ、非常に重要な法然聖人の言葉がありまして、親鸞聖人と同じように結婚の問題を持つておられた方が法然聖人にお尋ねしたところ、「妻をもうけて念仏申しやすければ妻をもうくべし。聖にて念仏申しやすければ聖にて申すべし」とあります。現代語訳しますと「結婚

ないことがたくさん出てきます。その判断せねばならない時に、これは行うべきか止めるべきかの判断の拠り処になるものを確立することが、いわばご信心を賜るということの本来の意味なのです。手を合わすということは、ただ手を合わせればよいということではなくて、その対象になるものを心から大切に思っておりま

の心の中に確立することですから、私はそれを内面的なご本尊を打ち立てていくことと言います。それを非常に具体的におっしゃったのが法然聖人でした。少し辛口になりますが、改めて尋ねますと、皆さんにとって本当のご本尊は何になっていますか？これはすべきかするべきではないかという時の拠

皆さんにとって本当のご本尊は何になっていますか

したほうがお念仏をしやすいのだったら結婚しなさい。結婚してお念仏しにくくなるのだったら結婚してはいけません」ということです。なんともない言葉に聞こえるかもしれないませんが、ここに宗教の極致があります。私自身が人生を生き抜いていく中で、これは良きことか良からぬことかということを判断せねばなら

すということなのです。私の人生において一番大切なものであります。仏教の言葉で言えば、ご本尊を我が心に確立することなのです。この一番大切なものを障げるものは慎んでいかなければならないし、それがより輝きを増すようなことであれば、嫌なことでもしなければならぬというものが、最も大切にされるものを自分

り処になっているものが仏法か否か。カタチの上では仏法なんですけど、実質的には何なのかというところが実は問題なのです。私の感覚でものを言わせていただきますと、今の世の中では一目瞭然の目には見えない宗教、私を動かしているものがありますね。目には宗教とは見えないけれども、私の人生を左右している

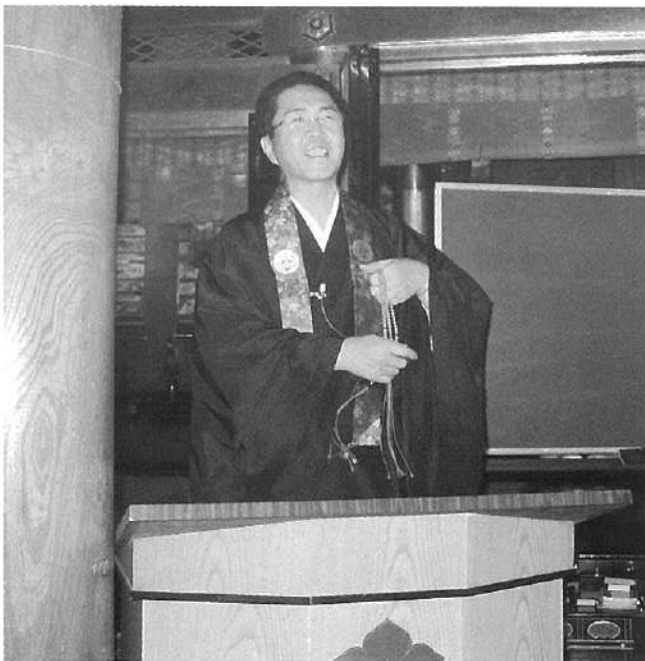
ものがあります。わかりませんか？もうちょっとヒントを出しましょうか。火事になったとしたらまず何を持っていくますか？これ以上は言いません。それが、目には見えない宗教ですね。そうなりまして、目に見える宗教で、行動し判断してらっしゃるか、目に見えない宗教で行動し判断してらっしゃるのかは、それぞれお考えになったほうがよいと思います。親鸞聖人がご結婚を決断された時には、阿弥陀さまのご本願の素晴らしさというものを自分たちご夫婦の姿の上に明らかにさせていたんだという深い意識があったと思うのです。お互い好きであったというのが前提だとは思いますが、ただ好きだけで結婚されたというだけではないでしょう。しかも、この結婚はやがて親鸞聖人のいのちをも危なくする原因だったのです。

御正忌報恩講

一月十三、十六日

今年はまったく雪のない暖かい御正忌でした。十一月に退院した副住職も出勤して厳かにお勤まりになりました。十五、十六日の三座は福井千福寺ご住職の心にしみるご法話をお聴聞しました。また、御満座のお勤めの前には、鬼原猛教化部長の司会で仏婦役員が解答者になってのお寺でクイ

ズ。今回は答えが二択だったため、正解者が十人を越えて賞品が足らなくなつてうれしい悲鳴でした。十六日の下村お講では、住職の結婚（六月）をお祝いして松花堂弁当のお齋が出ました。心のこもった美しいお料理に総代さんたちも感動、お越しになれなかった方はどうか写真で味わってください。



高務哲量師



各地区からのローソク代のはり紙



おけそくづくりのお世話方



野島責任役員のあいさつ





司会の鬼原さん



解答者は仏婦役員



転法輪正視師



クイズに答えるみなさん



ニヶ寺の住職・若院



副住職も出勤



住職の視聴覚説法



松花堂弁当に美しくつまられたおとき



福引の賞品



お道具あてクイズ



成人式おめでとう



12月30日 恒例のもちつき大会



ヨイショ!



もちつき大会のくじびきであたったよ～



新年のご挨拶後、おでんを囲んで和やかに



寺報発送作業の教化部の方に



新春かるた会



除夜の鐘

年頭参り

新しい年が明けたらまず仏さまにごあいさつ。善巧寺では、毎年一月一日の朝八時頃から夕方までおでんを用意してお待ち受けをしております。ご存じの方は恒例行事で、知られない方もまだまだ多いようです。来年は是非お参りください。

やさしさと勇氣表現

黒部の「とべないホタル」上演

黒部市宇奈月浦山の「いホタル」をミュージカル雪ん子劇団（雪山玲子さん主宰）は二十一日、同市の国際文化ホール・コラレで、黒部市合併記念公演を開き、「とべないホタル」をミュージカルで上演した。同劇団は、演劇を通して、現でる子どもたちを育う、昭和五十四年から地元の小学生を対象に活動の場を続けている。とべないホタルは、小沢昭巳さん（富山市）の原作。野崎弘通さん（同）がミ



「とべないホタル」をミュージカルで上演した雪ん子劇団

ユイカル用の曲を担当した。雪ん子シア（OB）を含む小学一年生から中学二年生までの二十八人が出演し、仲間を思いうさしさを勇氣を、表現力豊かに演じた。二十四日には、同劇団の活動拠点・善巧寺で卒業公演がある。

ホタル飛びかう美しい舞台になりました。良い作品・美しい音楽をひきたてる照明、懸命に演じる子どもたち、それらが一体となった舞台でした。カーテンコールでは小沢昭巳先生と野崎弘通さんに舞台上に上がってもらい「ごあいさついただきました。」「子どもたちがまっすぐに育っていることに感動した」とおっしゃる小沢先生の言葉に感動しました。

寺 五月

五月

一日 音沢お講①

三日 総代会

六日 音沢お講②

一七日 念仏奉仕団

二〇日 仏教団花まつり

二七日 雪ん子黒部公演

寺 六月

六月

一日 東狐・上野お講

二日 住職奉式

一〇日 仏舍利塔法要

一六日 音沢お講③

ご門主さまの本がでました
大好評発売中
是非お求め下さい



世のなか安んぜられ
現代社会と仏教

大谷光真

心豊かに生きることのできる世の中をめざして
西本願寺24代門主大谷光真の日本と仏教

第二十九回

花まつり

～花の誕生会～

四月十五日 十時

花まつりとは、お釈迦さまの誕生日（四月八日）。善巧寺では、花まつりに合わせて、赤ちゃんの誕生を祝う「初参式」を行います。赤ちゃんが生まれたらまずお寺で初参り。今年の縁日ミニライブゲストはオペラ歌手の内山太一氏。チューリップに囲まれて、ステキな歌声の中、新しいいのちをみんなでお祝いしましょう。

受付は九時半

冥加金三千元

お申し込みは

一三日までに

六五〇〇五五



清掃奉仕

四月八日午前八時半

（雨天順延）

花つみ

四月十四日

午前八時集合

総代会

教化推進協議会

五月十三日午後一時

納骨におかみそり

黒西組念仏奉仕団

参拝者募集中！

五月十七日～十八日

黒西組（魚津、黒部、

宇奈月の浄土真宗西本願寺派寺院）のご門徒合同団体参拝旅行です。本山で清掃奉仕をし、大谷本廟へも参拝しますので、納骨される方はこの機会にどうぞご参加ください。

ブツダからのメッセージ

仏教入門講座

昨年好評を頂きました仏教入門講座を今年も月一回ペース計六回で行います。テーマは「ブツダはなにを教えられたのか？」。仏教を基礎から学んでみたい方は是非ご参加ください。

講師：雪山俊隆、玲子

会費：一回五百円

時間：午後八時から

*初回は四月十九日です。

合 掌

今年に入っても雪がなく暖冬で終わるかと思いきや、そうは問屋が卸しませんでした。やっぱり。三月に入って雪また雪で寒さがひとしお身にこたえます。やはり私たちは飢渴寒暑で明け暮れています。その寒さの中、インフルエンザにもめげず練習に励んで元気いっぱい舞台を見せてくれたのは雪ん子たちです。反省会での下級生のコメントでは「やめたいと思うときもあるけど卒業までがんばります」という言葉が多く聞かれました。人にああしなさいこうしなさいではなく、自分が一生懸命に励む卒業生の姿そのものが下級生を導いたのです。あんな人になりたいと次の世代が思ってくれるような生き方をしたいものです。

